



Title	中・高校運動選手における競技バーンアウト尺度の因子構造の検討
Author(s)	小橋川, 久光; 宮城, 政也; 大嶺, 哲司
Citation	琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部(49): 99-106
Issue Date	1996-10
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/31985
Rights	

中・高校運動選手における競技バーンアウト尺度の因子構造の検討

小橋川久光 宮城政也 大嶺哲司

A Study of Factorial Structure of Athletic Burnout Inventory in Junior High School & Senior High School Athletes.

Hisamitsu KOBASHIGAWA* Masaya MIYAGI** Satoshi OHMINE***

(Received May 10, 1996)

Abstract

The purpose of this study was to analyze the factor structures of burnout in Junior high school, Senior high school athlete's & Senior high school baseball players by factor analysis. In addition, we published the relationships between Athletic Burnout Inventory (ABI) and Maudsley Personality Inventory (MPI) in Senior high school baseball players.

The results obtained were as follows;

1) The two factors of burnout were extracted by factor analysis in Junior high school, Senior high school athlete's & Senior high school baseball players. And then, cumulative contributions were 27.6% for Junior high school, 31.3% for Senior high school athlete's and 35.5% for Senior high school baseball players, respectively.

2) We understood that Junior and Senior high school athlete's were not burnout but suspected burnout.

3) The correlations (Pearson r) of ABI for a score of Extraversion-Introversion of MPI ($r=-0.37$, $p<.01$), and a score of Neuroticism of MPI ($r=0.39$, $p<.01$) were significant.

研究目的

燃えつき症候群 (Burnout Syndrome) という用語は、医療スタッフのメンタルヘルスの問題として、主にアメリカで研究が行われてきた。

宗像・稲岡 (1994)^{1) 19)}によれば、この「燃えつき」という用語は、もともと1960年代のアメリカのヘルス・ケア領域で、全く手の施しようもな

くなった麻薬中毒者の状態を指す俗称 (burnout on drug) であり、現在のような使われ方をするようになったのは、1970年代半ばにアメリカの精神科医 Freudemberger (1974)¹⁵⁾ が医師、ソーシャルワーカーなどの対人サービスを担う専門職の人々の仕事上の諸条件から生じる、身体的、情緒的消耗によって現れる種々の心理的問題を、今日の意味でいう「燃えつき」という言葉で用い始

* Phys. Educ., Coll. of Educ., Univ. of the Ryukyus.

** Phys. Educ., Division of General Educ., Univ. of the Ryukyus.

*** Japan Swimming School, Urasoe.

めたのが最初である、と報告している。さらに、Freudenberger (1974) は、燃えつきに陥る過程などに焦点をあてた研究を行い、1974年に *Journal of Social Issues* 誌にその結果を発表して以来、社会心理学、臨床心理学の分野で大きな関心事となった。

近年、わが国のスポーツ心理学界においても、岸・中込 (1988)^{4) - 9) 11) - 13)} らのグループを中心に、運動選手の記録の停滞、試合での敗北、怪我などによって生ずる、無気力、抑うつといった心理的不適応の一部が、運動選手のバーンアウトに対応する現象ではないかと注目し始めた。そして、彼らは、従来の対人サービス領域でのバーンアウト研究に着眼し、運動選手のバーンアウトに関する概念的枠組みの中で症候群的視点からバーンアウトを捉えた。その際、Maslach & Jackson (1981)¹⁶⁾ の作成した Maslach Burnout Inventory (MBI) が運動選手のバーンアウトを測定するのに適切であると考え、MBI を競技場面に置き換えた質問項目を大学運動選手に実施している。その因子分析の結果、第1因子 (競技に対する情緒的消耗)、第2因子 (個人的成就感)、第3因子 (チームメイトとのコミュニケーションの欠如)、第4因子 (競技への自己投入) の4因子を抽出し、運動選手版バーンアウト尺度を作成した。

ところで、青年後期にバーンアウトした競技者の多くは、早期からのスポーツへの同一化ないしは強固な、しかも限定された自我同一性の形成といったような側面が関係しているのではないかという指摘⁶⁾ があるように、早期のスポーツ経験は、その後の人格形成に多大な影響を及ぼすことが考えられる⁴⁾。しかし、現在においては、自我同一性が形成したであろう大学運動選手や一流競技者を対象にしたバーンアウト研究に力が注がれ、青年後期以前に位置するジュニア期を含めたバーンアウト研究は極めて少ないのが現状であり、ジュニア期を含めた研究が必要であると考えられている。

そこで、筆者らは、1993年以来、青年後期の前段階にあたる中・高校運動選手を対象にし、バーンアウト尺度の検討およびその因子構造の把握を試みることを目的に研究を行ってきた。本研究は、小橋川ら¹⁰⁾ が中学運動選手を対象とした研究を沖縄心理学会で、宮城ら¹⁸⁾ が高校野球選手を対

象にした研究を九州体育学会で口頭発表、大嶺の高校運動選手全般の修士論文の一部をまとめたものである。以上のことから本研究の目的は、スポーツ選手のバーンアウト度を測定するために、岸・中込によって作成されたABI (Athletic Burnout Inventory) の中・高校生への適応可能性と因子構造を検討するものである。なお、高校野球選手においては、バーンアウト尺度と性格特性 (MPI) との関連について明らかにするものである。

方 法

1) 調査対象および調査期日

中学校運動選手 468名 (男子279名、女子189名)、1994年10月～11月
高校野球選手 473名、1993年5月～6月
高校運動選手 810名 (男子495名、女子315名)、1995年4月～6月

2) 調査項目

岸・中込らが作成したABI (Athletic Burnout Inventory : 19項目) を用いた。なお、高校野球選手については、バーンアウト尺度と性格特徴との関連性を明らかにするためMPI (Maudsley Personality Inventory : 80項目) について調査を行った。評定尺度は、中学生運動選手、高校生運動選手においては5件法、高校野球選手においては7件法を用いた。

結 果

【結果-1】因子分析について

まず始めに、運動選手を対象としたバーンアウト尺度の因子構造を検討するため、バーンアウト尺度 (19項目) の相関行列を求め、それに基づいて重相関係数の自乗による共通性を推定し主因子法によって因子を抽出し、バリマックス回転を施した。回転前の固有値については、表1に中学運動選手、表2に高校野球選手、表3に高校運動選手の結果が示されている。いずれにおいても第2因子と第3因子との間にかかなりの落差が見られることにより第2因子まで抽出することが適切であると判断される。

中・高校運動選手における競技バーンアウト尺度の因子構造の検討

表1. 中学運動選手の回転前の固有値

因子	固有値	寄与率(%)	累積寄与率(%)
1	3.15280	16.6	16.6
2	2.09740	11.0	27.6
3	0.60880	3.2	30.8
4	0.51180	2.7	33.5

表3. 高校運動選手の回転前の固有値

因子	固有値	寄与率(%)	累積寄与率(%)
1	4.48166	23.6	23.6
2	1.57570	8.3	31.9
3	0.65382	3.4	35.3
4	0.38666	2.0	37.4

表2. 高校野球選手の回転前の固有値

因子	固有値	寄与率(%)	累積寄与率(%)
1	5.09410	26.8	26.8
2	1.65480	8.7	35.5
3	0.67490	3.6	39.1
4	0.41610	2.2	41.3

表4～6に回転後の因子負荷行列が示してある。固有値1.0以上、因子負荷量0.4を基準に因子項目抽出および因子の解釈を行った。表4の中学生について、第1因子は、項目番号(2、8、12、14、16、18、19)の7項目、第2因子には、項目番号(1、7、9、10、11、13)の6項目であり、項

表4. 中学運動選手の回転後の因子負荷行列

質問項目	第1因子	第2因子	共通性	
第1因子 (競技に対する情緒的消耗)				
1. 私は競技生活にうんざりしている	-0.116	-0.489	0.253	
3. 私は競技に燃え尽きたと感じる	0.179	-0.338	0.146	
5. 自分自身の競技の目標がはっきりと定まっていない	0.015	-0.296	0.088	
7. 競技することがつまらなくなると感じる	-0.238	-0.560	0.371	
9. 練習することは今の私にとって大きなストレスとなっている	-0.085	-0.608	0.378	
11. 以前平気でやっていた練習が今は嫌でたまらない	-0.199	-0.606	0.407	
13. 私は競技に行き詰まっていると感じている	-0.102	-0.595	0.364	
17. 私は練習のしすぎだと思う	0.182	-0.287	0.115	
第2因子 (個人的成就感)				
2. 私はチームに貢献している	-0.586	0.354	0.345	
8. 私はクラブに関する問題をうまく解決している	-0.518	0.042	0.270	
14. 私の役割やチームへの貢献はチームから十分認められている	-0.663	0.028	0.440	
16. 私はクラブの人達とリラックスした雰囲気を作ることができる	-0.585	-0.102	0.352	
18. 私はクラブの人達からよく理解されている	-0.666	0.021	0.443	
第3因子 (チームメイトとのコミュニケーションの欠如)				
4. 周りの人たちは私を快く思っていない	0.051	-0.361	0.133	
10. 私はクラブの人達と親密な交際ができなくなっている	-0.165	-0.472	0.250	
15. チームメイトとのコミュニケーションが少なくなった	0.008	-0.356	0.127	
第4因子 (競技への自己投入)				
6. チームメイトは自分にとって大切な人達である	-0.335	-0.103	0.123	
12. 私の競技生活はこれまで非常に価値のあるものであった	-0.565	-0.078	0.326	
19. 私はチームメイトと練習した後は有意義な気持ちになる	-0.550	-0.134	0.321	
因子寄与率 (%)		16.6	11.0	27.6

目番号(3、4、5、6、15、17)が欠落している。また、欠落した項目の共通性の推定値においても他の項目と比較して非常に低いことを示している。また、第1因子の寄与率16.6%、第2因子の寄与率11.1%であり、第2因子までが説明する分散は、全体の27.6%であった。

そこで、上記の結果を基に因子の解釈および命名を試みた。今回抽出した第1因子は、岸・中込

が抽出した第2因子によく対応しており、一部第4因子(項目12.19)を含んでいる。このことから第1因子は、個人的成就感と命名することができる。第2因子は、岸・中込の第1因子とよく対応し一部第3因子(項目10)を含んでいる。このことから第2因子は、情緒的消耗と命名することができる。

表5. 高校野球選手の回転後の因子負荷行列

質問項目	第1因子	第2因子	共通性
第1因子(競技に対する情緒的消耗)			
1. 私は競技生活にうんざりしている	0.826	0.093	0.691
3. 私は競技に燃え尽きたと感じる	0.432	-0.153	0.210
5. 自分自身の競技の目標がはっきりと定まっていない	0.399	0.030	0.160
7. 競技することがつまらなくなったと感じる	0.820	0.041	0.673
9. 練習することは今の私にとって大きなストレスとなっている	0.714	0.113	0.523
11. 以前平気でやっていた練習が今は嫌でたまらない	0.804	0.172	0.677
13. 私は競技に行き詰まっていると感じている	0.700	0.111	0.502
17. 私は練習のしすぎだと思う	0.526	-0.010	0.277
第2因子(個人的成就感)			
2. 私はチームに貢献している	0.108	0.583	0.352
8. 私はクラブに関する問題をうまく解決している	0.100	0.498	0.258
14. 私の役割やチームへの貢献はチームから十分認められている	0.097	0.624	0.398
16. 私はクラブの人達とリラックスした雰囲気を作り出すことができる	0.166	0.458	0.238
18. 私はクラブの人達からよく理解されている	0.066	0.580	0.341
第3因子(チームメイトとのコミュニケーションの欠如)			
4. 周りの人たちは私を快く思っていない	0.357	0.250	0.190
10. 私はクラブの人達と親密な交際ができなくなっている	0.408	0.412	0.337
15. チームメイトとのコミュニケーションが少なくなった	0.373	0.400	0.300
第4因子(競技への自己投入)			
6. チームメイトは自分にとって大切な人達である	0.160	0.336	0.138
12. 私の競技生活はこれまで非常に価値のあるものであった	0.300	0.338	0.204
19. 私はチームメイトと練習した後は有意義な気持ちになる	0.394	0.360	0.285
因子寄与率(%)	23.1	12.4	35.5

表6. 高校運動選手の回転後の因子負荷行列

質問項目	第1因子	第2因子	共通性
第1因子（競技に対する情緒的消耗）			
1. 私は競技生活にうんざりしている	0.700	0.209	0.533
3. 私は競技に燃え尽きたと感じる	0.443	-0.162	0.197
5. 自分自身の競技の目標がはっきりと定まっていない	0.318	0.295	0.189
7. 競技することがつまらなくなつたと感じる	0.693	0.190	0.517
9. 練習することは今の私にとって大きなストレスとなっている	0.742	0.201	0.590
11. 以前平気でやっていた練習が今は嫌でたまらない	0.695	0.191	0.352
13. 私は競技に行き詰まっていると感じている	0.559	0.198	0.257
17. 私は練習のしすぎだと思う	0.500	-0.080	0.252
第2因子（個人的成就感）			
2. 私はチームに貢献している	0.012	0.387	0.150
8. 私はクラブに関する問題をうまく解決している	0.030	0.338	0.115
14. 私の役割やチームへの貢献はチームから十分認められている	-0.097	0.456	0.208
16. 私はクラブの人達とリラックスした雰囲気を作り出すことができる	0.068	0.577	0.338
18. 私はクラブの人達からよく理解されている	-0.047	0.517	0.270
第3因子（チームメイトとのコミュニケーションの欠如）			
4. 周りの人たちは私を快く思っていない	0.222	0.459	0.260
10. 私はクラブの人達と親密な交際ができなくなっている	0.256	0.510	0.325
15. チームメイトとのコミュニケーションが少なくなった	0.262	0.602	0.432
第4因子（競技への自己投入）			
6. チームメイトは自分にとって大切な人達である	0.219	0.426	0.230
12. 私の競技生活はこれまで非常に価値のあるものであった	0.286	0.357	0.209
19. 私はチームメイトと練習した後は有意義な気持ちになる	0.230	0.456	0.261
因子寄与率（%）	23.3	8.0	31.3

表5の高校野球選手について、第1因子は、項目番号（1、3、7、9、11、13、17）の7項目、第2因子には、項目番号（2、8、14、15、16、18）の6項目であり、項目番号（4、5、6、10、12、19）が欠落している。また、第1因子の寄与率26.6%、第2因子の寄与率8.9%であり、第2因子までの説明する分散は、全体の35.5%であった。そこで、上記の結果を基に因子の解釈および命名を試みた。今回抽出した第1因子は、岸・中込が抽出した第1因子と8項目中7項目が対応することから競技に対する情緒的消耗と命名した。第2因子は、岸・中込が抽出した第2因子の5項目

と全てが対応し一部第4因子（項目15）を含んでいる。このことから個人的成就感と命名した。

表6の高校運動選手について、第1因子は、項目番号（1、3、7、9、11、13、17）の7項目、第2因子は、項目番号（4、6、10、14、15、16、18、19）8項目であり、項目番号（2、5、8、12）が欠落している。また、第1因子の寄与率23.3%、第2因子の寄与率8.0%であり、第2因子までの説明する分散は、全体の31.3%であった。因子の解釈および命名の結果は、今回抽出した第1因子が、岸・中込が抽出した第1因子と8項目中7項目が対応することから、競技に対する情緒

的消耗と命名した。第2因子の命名を行うため、今回の調査で抽出した第2因子の意味内容を検討した結果、全ての項目で「チームメイトと…」 「クラブの人達と…」などの対人関係の疎通性の問題を含む項目が抽出されたことと、岸・中込が抽出した第3因子を全て含むことから、彼らの命名をそのまま適用し、チームメイトとのコミュニケーションの欠如と命名した。このことは、第2因子において、同じ高校生を対象とした野球選手との間に因子構造の違いがみられた。

【結果-2】高校野球選手のバーンアウト尺度と性格特徴(MPI)との関連性について

表8は、バーンアウト尺度と性格特徴(MPI) (内向性・外向性/Extraversion・Introversion) 以下、E尺度と、(神経症的傾向/Neuroticism) 以下N尺度との間の相関係数を示したものである。

表7. MPI判定カテゴリー別ABI平均得点

MPI判定カテゴリー	ABI	N	SD
E ⁻ N ⁺	58.3	18	16.1
E ⁻ N ⁰	54.8	8	6.3
E ⁰ N ⁺	46.2	56	13.7
E ⁰ N ⁰	41.6	61	15.4
E ⁺ N ⁻	41.5	71	16.4
E ⁻ N ⁻	39.4	14	13.8
E ⁰ N ⁻	35.9	51	10.9
E ⁺ N ⁰	33.6	94	15.1
E ⁺ N ⁻	27.7	103	12.7

F=17.02 (**), df=8, 467, **: P<.01

表8. ABI尺度とMPI間の相関係数

	変数	r
M	E尺度 外向性 - 内向性	-0.37 **
P	N尺度	0.39
I	神経症的傾向	**

** : P<.01

E尺度とバーンアウト尺度との間に (r=-0.37) 1%水準で有意な負の相関係数が認められ、N尺度との間に (r=0.39) 1%水準で有意な相関係数が認められた。

さらに、詳細な性格との関わりをみるために、9つのMPI判定カテゴリー別性格特徴におけるバーンアウト平均値比較を行った。その結果、表7に示すように、最もバーンアウト得点が高いカテゴリーとして、E⁻N⁺ (非常に内向的で神経症的傾向が非常に強い) 平均58.3点となり、最もバーンアウト得点の低いカテゴリーとして、E⁺N⁻ (非常に外向的で神経症的傾向はほとんどない) 平均27.7点となった。また、分散分析による各カテゴリー間における平均値比較の結果 (F=17.02) 1%水準で有意な差が認められた。

考 察

【考察-1】因子分析の検討

岸・中込の大学生を対象とした因子構造の検討の結果が第4因子まで抽出され、第4因子までの説明率が52.3%であったのに対して、今回の中・高校運動選手を対象とした場合は、第2因子までしか抽出されなかったことと、第2因子までの説明率が中学運動選手では27.6%、高校野球選手では35.5%、高校運動選手では31.9%と低い値を示したことから、明らかに因子構造の差異が伺える。中学生については、欠落した項目番号の中に競技バーンアウトで重要と思われる項目3、「私は競技に燃え尽きたと感じる」、項目17「私は練習の

しすぎだと思ふ」等があり、この結果は必ずしも競技バーンアウトを示していると解釈することは妥当ではないと思われる。

一方、高校野球選手および高校運動選手については、岸・中込が抽出した第1因子に8項目中7項目が対応したこと、バーンアウトの中核をなす「私は競技に燃え尽きたと感じる」という項目が抽出された。また、第1因子については、中学運動選手に比べ本来の競技バーンアウトの第1因子に類似した項目が抽出されたこと、および累積寄与率が高くなったことから、多少競技バーンアウトの因子構造に近づく傾向にあった。しかしながらいずれの因子分析においても、2因子しか抽出されなかったことは、中学運動選手同様、高校レベルにおいても因子が完全に分化しておらず必ずしも競技バーンアウトを示していると解釈することは妥当ではないと考えられる。スポーツ少年団（小学校レベル）を対象とした因子分析の結果においても、「情緒的疲弊因子」と「自己成就、隣人化因子」の2因子しか抽出されず、このレベルでのやる気の停滞現象は、疑似バーンアウトと解釈されており¹⁷⁾、本結果も同様な解釈ができよう。

【考察-2】バーンアウト尺度と性格特徴（MPI）との関連性について

バーンアウト得点とMPI、E尺度 ($r=-0.37$)、N尺度 ($r=0.39$) との間に、1%水準で有意な相関関係が認められた。特にN尺度（神経症的傾向）については、岩佐ら²⁾の報告した ($r=0.322$) 0.1%水準で有意な相関関係と、ほぼ同様の結果が得られた。

また、MPI判定カテゴリーについて、今回最もバーンアウト平均得点値が高かったE-N+（非常に内向的で神経症的傾向が非常に強い）の性格特徴としては、「正直、真面目で責任感がよく、反応を起こしやすい、また、時には抑うつ的になり、自分自身が悩むことは他のいずれの性格よりも強く、些細なことで自分に責任を問う傾向がある」があげられ、このことはバーンアウトの基本的な病前性格とほぼ一致していると考えられる。

このように、高校野球選手におけるバーンアウ

トを考えると、今回の調査はバーンアウト尺度の高低のみならず、性格特徴、精神症状といった選手個々の心理的特徴も十分に考慮すべきであるということを示すものであり、バーンアウト判定において重要なファクターになりうるものと思われる。

まとめ

中・高校運動選手および高校野球選手にバーンアウト尺度を実施し、因子分析（主因子解、ノーマルバリマックス回転）を行った結果、下記の通りである。

- 1) 中学運動選手、高校野球選手および高校運動選手いずれにおいても第2因子までしか抽出されなかった。累積寄与率は、それぞれ27.6%、35.5%、31.3%であった。
- 2) 中・高校レベルでは競技バーンアウトと解釈するより疑似バーンアウトと解釈することが妥当と思われた。
- 3) バーンアウト得点とMPI、E尺度 ($r=-0.37$)、N尺度 ($r=0.39$) との間に、1%水準で有意な相関関係が認められた。

文 献

- 1) 稲岡文昭 (1988) 米国における燃えつき現象研究の動向。土居健郎監修。燃えつき症候群。金剛出版。pp.23-32.
- 2) 岩佐美喜子・岸順治 (1992) 運動選手のバーンアウトと精神症状との関係。日本スポーツ心理学会第19回大会研究発表抄録集。
- 3) 海老原修・岸順治・白山正人・松尾哲矢 (1991) ジュニア選手のバーンアウトを考える。日本体育協会科学研究報告集。pp. 175-191.
- 4) 岸 順治・中込四郎・他 (1988) 運動選手のバーンアウト状態の特徴について。日本体育学会第39回大会号。p. 156.
- 5) 岸 順治・中込四郎・高見過和至 (1988) 運動選手のバーンアウト尺度作成の試み、スポーツ心理学研究。15(1) :54-59.
- 6) 岸 順治・中込四郎 (1989) 運動選手のバーンアウト症候群に関する概念規定への試み。

- 体育学研究, 34 (3) : 235-243.
- 7) 岸 順治・竹田 徹・吉井 泉・鈴木 壮 (1991) 運動選手のバーンアウト状態の変容—競技活動の満足度と性格特性の影響—. スポーツ心理学研究, 18 (1) : 75-77.
- 8) 岸 順治・鈴木 壮・中込四郎 (1992) 運動選手のバーンアウトと不合理的概念との関連. 日本スポーツ心理学会第19回大会研究発表抄録集.
- 9) 岸 順治 (1994) 運動選手のバーンアウトの理解と対処. *Japanese Journal of Sports Sciences* 13 (1) : 9-13.
- 10) 小橋川久光・宮城政也・大嶺哲司 (1995) 中学スポーツ選手に対する競技バーンアウト尺度の検討. 沖縄心理学会口頭発表.
- 11) 中込四郎 (1988) 運動選手バーンアウト (Burnout) について—1 症例の競技歴を通して—. 日本スポーツ心理学会.
- 12) 中込四郎・岸順治 (1991) 運動選手のバーンアウト発症機序に関する事例研究. 体育学研究 35 (4) : 313-323.
- 13) 中込四郎・宗像恒次・白山正人・岸順治 (1992) スポーツ競技者のバーンアウトについて (ワークショップ報告). スポーツ心理学研究, 19 (1) :61-63.
- 14) 永吉宏英 (1988) 少年スポーツの動向と学校スポーツ. 学校体育, pp 28-33.
- 15) Freudenberger, H.J (1974) "Staff burn-out". *Journal of Social Issues*, 159-165.
- 16) Maslach, C. and Jackson, S.E. (1981) "The measurement of experienced burnout." *Journal of Occupational Behaviour*, (2) : 99-113.
- 17) 松尾鉄矢・多々納秀雄・他 (1990) スポーツ競技者のバーンアウトに関する実証的研究—スポーツ少年団をめぐって—. 日本体育学会第43回大会号, p.127.
- 18) 宮城政也・小橋川久光・大嶺哲司 (1994) 高校野球選手におけるバーンアウトの因子構造に関する研究. 九州スポーツ心理学会第43回大会号, p.48.
- 19) 宗像恒次 (1994) 燃えつき症候群の特性分析. 岡堂哲雄編集, 精神病理の研究. 至文堂, pp.187-201.